元の諸帝の文學（五）

――元史叢說の一――

吉川幸次郎

七　むすび

以上述べ來つたところから見て、元朝末年の天子たちが、漢文に對し、相當の興味と能力とをもつてゐたことは、ほゞ疑ひのないところと信ずる。漢文を讀解する能力なくして、文宗の如く、また順帝の如く、支那の書法に興味をよせるといふことは、あり得べからざることであるからである。他の北族の朝廷が辿つたのと同じ漢化の道路を、この朝廷も、その末年においては、程度の差こそあれ、辿りつつあつたとせねばならぬ。さうしてまた、そのことは、元末の天子の置かれた環境を考へて見れば、むしろ當然のことと思はれる。

第一は、天子の生活の本據が、大都燕京に置かれ、漢人の生活と不斷の接觸をもつやうになつたことである。大都の宮禁が世祖によつて營造されて以後、蒙古の天子も、奉章閣記にもいふやうに、「人君にして恒居ある」ものとなつたのであり、もはや漢北の帳殿を轉〻する北方の君長ではない。漢人の生活の渦まく中に住む中國の「皇帝」である。むろん宮禁の中では、譜代の蒙古臣僚の勢力が、支配的であつたに相違ない。しかし宮禁の中の生活が、宮禁の外にひろがる漢人の生活と、沒交渉であり得る筈はないばかりでなく、宮禁の中でも、漢人、ことに南方の漢人、すなはち當時の言葉でいへば「南人」の勢力が、仁宗の科學復活を契機として、次第次第に浸透しつつあつたこと

は、さきに文宗の條で、その一端に觸れた通りである。また毎年の恒例として行はれた上都ドゥンノールへの清暑の御幸は、漢化の方向を抑制して、蒙古の舊俗を保存させるに、有効であつたには相違ない。しかしその上都への御幸にも、やがては文宗の「時巡」に扈從した黄河の如く、南人の文臣が扈從してゐるのである。かく漢人との接觸面が增加するに連れ、漢化の現象が次第に顯著になつてゆくのは、當然である。何となれば蒙古自體は、確固たる文化をもたぬ民族であり、いはゞ白紙である。白紙はいかなる色にも染みやすい。漢土の中に置かれれば、漢土の色に染んでゆくのは、好むと好まざるとに拘らず、やむを得ぬ仕儀である。この意味からいへば、世祖が都城を燕京に定め、大蒙古帝國の首長たる位置を放棄して、「中國」の「皇帝」となつたといふことは、既にその子孫の漢化を豫約するものであつたといはねばならぬ。

第二には、西域との交渉の減少である。蒙古人が、他のおほむねの北族の如く、容易に漢化の道を辿らなかつたのは、狩野先生が「元曲の由來と白仁甫の梧桐雨」で仰せられる如く、また羽田先生が「元朝の漢文明に對する態度」で仰せられる如く、支那に接するよりも先に、西域の文化に接したからであつて、その爲、他の北族の如く、支那文化を、この世界に於ける唯一のものとも、また最高のものとも、意識しなかつたことに基づく。つまり白紙は支那の色に染むより先に、西域の色に染まつてゐたのであり、かく別の色に染んでゐたことが、その漢化を妨げてゐたのである。ところでこのことは、國初の時代にあつては、まさしくさうであつたに相違ない。しかし西域の文化に對する尊敬と、尊敬に伴ふ攝取とが、持續される爲には、更にその前提として、西域との間に、不斷の交渉がなければならぬ。國初の蒙古の事態は、むろんさうであつた。しかしさうした事態は、世祖の末年以後も、保持されたかどうか。西域の使者に關する消息は、成宗以後の「元史」の本紀にも散見しないわけではない。しかし國初における如く頻繁ではない。その邊の事情に、私はことにうといので、詳しくは專家の教へを待たねばならぬけれども、要するに西域の色は褪せざるを得ぬ狀態にあつたことは確かである。西域の色の褪せたあと、そこへ浸潤してゆくものは、漢土の色であ

る。或ひは、西域の文化といふ一つの色、それに染んだといふ經驗は、新しい色に染むのを、より容易にしたかも知れぬ。世祖が西域をも含めた大蒙古帝國の首長たる位置を放棄し、支那のみの「皇帝」となつたことは、この意味に於ても、子孫の漢化を豫約するものであつた。

要するに元朝末年の蒙古朝廷は、漢化の可能性を多分に孕む空氣にあつた。その中から、文宗の如く、また順帝の如く、人の文字の生活に興味を抱き、自らもその實踐に參加せんとする天子を出すに至つたのは、多く怪しむに足りない。およそ智識は、苦痛を伴はずしては修得されないと共に、快樂を伴はずして修得される智識といふものもない。漠北を馳驅した時代の蒙古人にとつては、文字の修得は、專ら苦痛であつたであらう。しかし元末の天子は、その父祖たちとは、環境を異にするのである。やがてはその快樂としての面が、より多く意識に上るべき時期にあつた。狗馬聲色といふ父祖以來の快樂、それも依然として快樂であつた。と共に、漢字漢文といふ新しい快樂が、その生活に浸潤すべき時期に到達してゐたのである。

さうしてその時期の成熟は、文宗、順帝に至つてであるけれども、しかるべき萌芽は、それ以前にも伏在してゐたかと考へられる。ことに蒙古の天子たちを、快樂としての漢文、或ひは漢書へと導くについて、有力な媒となつたのは、支那の古典の、說話としての面白さではなかつたか。人は誰も、お伽噺を求める本能をもつてゐる。ところで蒙古自體は、どれだけの昔話をもつてゐたか。「元朝秘史」の示す程度でならば、程の知れたものである。また西域との接觸によつて、多少の說話を輸入したとしても、支那の歷史のもつ面白さ、說話としての面白さには、敵し難かつたのではあるまいか。世祖が支那人の儒臣の說く支那經典の講說に、耳を傾けるにやぶさかでなかつたことは、元史の王鶚の傳に、「召對して、孝經、書、易、及び齊家治國の道、古今事物の變を進講し、每夜分にして乃ち罷む」とあるのを始め、必ずしも資料に乏しからぬ。かく儒臣の講說に耳を傾けたのは、もとより治道に資する爲でもあつたらうけれども、說話としての面白さが、たとひ世祖の自覺には上らずとも、その心をひいたことはないか。世祖の孫なる成宗についても、蘇天

爵の「滋漢文稿」の卷二十二、「資善大夫太醫院使韓公行狀」すなはち韓麟なる人物の行狀にはいふ、「元貞大德の初め、天下號して事無しと爲す。退朝の暇、優游燕閒のをりには、公を召して資治通鑑と大學衍義を讀ましむ。公は其の言を開陳し、綏にして迫らず、凡そ正身修身の要、用人出治の方、君臣善惡の跡、興廢治忽の由、みな爛然として睹る可し、帝從容として咨詢し、朝夕倦む無し」。乙夜万幾の暇には、侍醫の說く漢土の昔噺に、つれづれを慰めたのである。また「元史」の襲加歹の傳を讀むと、仁宗がその定策の功をよみして、「吾れ聞く周の文王には姜太公ありきと、襲加歹も予の家の姜太公なるかな」といつたと見える。姜太公とはすなはち太公望呂尙のことであるが、「姜太公」といふ俗な呼び方は、仁宗の智識が、雜劇か講談じ込みであつたことを推測させるが、それはともかくとして、支那の昔噺に對する興味を示すものには相違ない。また文宗の朝に「貞觀政要」が蒙古譯されたことは、前に李章閣の條下で觸れた通りであるが、この書は治道の書であると共に、唐の太宗をめぐる說話集であることが、注意されねばならぬ。

かく說話としての支那の古典に對する興味、それはむろん、當初のうちは、口譯乃至は筆譯でも滿足される。しかしここに問題となるのは、漢籍の翻譯語としての蒙古語の能力である。私は蒙古語には全く無智であるので、もとより臆測に止まらねばならぬけれども、滿洲語の方は、三田村泰助學士を煩はして、滿譯の西廂記をテクストに、數回の手ほどきを受けたことがあり、しかも三田村氏の異常な好意にも背いて、僅か二三回で挫折し、今に至るまで誠に相濟まぬ思ひを抱いてゐるのであるが、かく私の滿洲語が挫折したのは、もとより私の懶惰を主因とするけれども、又一つには、滿文の西廂記なるものは、何とも形のつかぬものであつたからである。それはたゞ形式的に漢字を逐字譯しただけのもので、漢文原文の讀解に資するなきは勿論、たゞ滿文だけを讀む讀者には、何のこととも理解できず、從つて何の興味をも引き起しさうにないものであつた。元の蒙古譯が、清の滿洲譯と全然同じであつたとは、いはぬ。また清の滿洲譯も、全部が全部、西廂記のやうなものばかりではないとは、當時三田村氏から繰り返して與へられた注意であつた。しか

し、北族の言語が、たとひ滿文西廂記の場合ほど極端ではなくとも、それと似た缺陷を露呈するのは、免れ難い運命と思はれる。想像の上に想像を重ねることになるけれども、もし果して然りとすれば、蒙古人中のやや聰明なものが、まどろつこしい翻譯を捨てて、直接漢字の原文に親しまうとするのは、あり得べき過程である。

或ひはまた、ウイグル字といふ音標文字を使用し來つた蒙古人にとつて、漢字のやうな意標文字を習ふことは、甚だ困難ではなかつたかといふ議論もあるかも知れぬ。いかにもそれもある程度の事實であつたらう。しかし、ここでも想起さるべきことは、蒙古は元來、文字のない民族であり、文字の生活に於ても白紙であつたことである。而してウイグル字は、西域からの借り物であることである。後にはまた帝師パスパが、蒙古の國字を制定したけれども、それは一層推行に困難であつたことは、周知のごとくである。かく、文字生活に於て白紙のものに取つては、音標文字必ずしも易からず、意標文字必ずしも難からぬ。それについて、私は一つの經驗をもつてゐる。私の長男は小學校に上る前、漢字ばかり憶えて、一向に假名を憶えなかつた。次男の場合には、それに懲りて、今度は強制的に假名を教へることにし、まづヤマと教へ、フネと教へた。ぢやヤネと書いてごらん、書けるだろ、ほれヤネだよといふと、子供は憤然として抗議した。それはヤマのヤぢやないのと。ヤマ必ずしも易からず、山必ずしも難からぬ。白紙はやはりどんな色にでも染む、のである。音標文字に慣れ切つた西洋人の見解に惑はされてはならぬ。假名の恩惠になれたわれ〳〵の見解のみを以て律してはならぬ。

私は以上のやうに考へる結果、元末の天子たちが、漢字を讀み得、また書き得たのは、別に不思議とするに當らぬと思ふ。ただしかし、なぜ然らば、元の末年に於ても、依然として漢書の蒙古譯が行はれてゐるのか。文宗の朝に貞觀政要の譯されたことは前に述べた。順帝親政の始めにも、拔實(パシ)が詔を承けて唐の楊相如の君臣政要論を譯したことが、黃溍の撰したその神道碑に見える。(黃學士文集二十五)これらは趙翼の考へに從へば、すなはち以て、天子が漢文に通じなかつた證左となすべきものである。

しかしながら、趙翼の考へは、再考を要する。勅を奉じて翻譯が行はれるのは、天子が漢文を讀めぬといふことを、必ず前提とするものであらうか。必ずしもさうではない。近い例を清朝に取れば、つい光緒の末年まで、臣僚の奏疏は滿漢兩文であつた。しかし清朝の天子たちが、漢文が讀めなかつたわけでは、毛頭ない。清の末年の天子たちは、むしろ滿文の方が讀めなかつたのである。にも拘らず、依然として滿文の譯文が添加されてゐるのは何故か。祖法であるからに過ぎぬ。由來、告朔の餼羊がうろつくのは、支那の制度の常である。清朝の末年と全く同じ事態が、元の末年にも起つてゐたといふのでは、もとよりない。しかし餼羊は、元の宮廷にも、うろついてゐたかも知れない。要するに趙翼のやうに、翻譯が行はれてゐた故に、元の天子のすべてが、翻譯にたよらねば漢人の言語を理解し得なかつたとするのは、即斷であると考へる。

更にはまた、かうしたことをも考へねばならぬ。由來、支那人には前朝のことを惡くいふ癖があり、清人は明のことを過度にあしざまにいひ、明人は元のことを過度にあしざまにいふとは、學生のころ狩野君山先生の講義で承つたことである。況んや華夷の見が加はる時は、なほさらのことである。元の天子の無學が強調されるのも、その邊の關係が手傳つてゐるのではないか。腥羶の氣、中州を掩ひ、飛んでもない野蠻の時代であつたとするのが、一般の明人の元に對する認識であるけれども、果してさういひ切れる面ばかりであつたか。これも、今を以て古を推せば、康熙も乾隆も漢文は讀めなかつたといふ說が、清末の漢人によつて盛んに唱へられたことがあるが、それは明かに虛妄である。元の天子の漢文の能力も、多少はさうした色眼鏡で眺められて來たのではないか。そも、あのお粗末きはまる元史を纂修してお茶を濁した明の洪武の朝廷の空氣と、遼金元三史を完成した元の順帝の朝廷の空氣とは、いづれが文化的であらうか。清の世宗の「大義覺迷錄」にはいふ、「則ち中國の歷代以來、如(たと)へば、有元は區宇を混一し、國を有(たも)つこと百年、幅員極めて廣し、其の政治規模は、頗る美德多きに、後世の稱述する者は寥々たり、其の時の名臣學士の、著作頌揚して、當時の休美を紀す者は、載せて史冊に在りて、亦た燦然として具備せるに、而かも後人は則ち故(ことさ)らに貶

詞を爲し、概しなみに謂ふならく、人物の紀す可く無く、事功の錄するに足るもの無しと。此れ特だ私心を懷挾し識見卑陋なる人の、美を外來の君に歸するを欲せずして、之を貶抑し淹沒せむと欲するなる耳」。世宗のこの上諭は、もとより別の意味で、爲にする議論である。しかし私は、その中に、案外に多くの眞を存するであらうことを思ふのである。

更にまた、以上のやうに考へて來れば、武宗仁宗以前の諸帝についても、再考の餘地がないではないと思はれる。たとへば世祖である。世祖が漢文を讀み得なかつたこと、これは疑ふべくもない事實であつて、その資料は甚だ乏しからぬ。かりにその一つを擧げるならば、黃溍の「江浙行中書省平章政事贈太傅安慶武襄王神道碑」すなはち也速解兒、初名は帖木兒の神道碑には、至元十六年のこととして、「省檄を奉じ邊事を馳報す、王おもへらく、機事は密にせざる可からずと、便殿に入對し、奏牘を懷より出す、上大いに之を奇とし、近臣の文墨を知る者を召して進讀せしめんとせしが、左右に適ま其の人無し、王拜して言へらく、臣も亦粗、文墨を知ると、即ち其の文を誦して、釋するに譯語を以てす、音吐明暢にして、辭旨精切なり、上悅びたまひぬ」といひ、時の丞相安童から、「帖木兒は蒙古の人なるに、漢人の語言文字に於て通ぜざる所なし」と推奬された也速解兒が、世祖の知遇を得たのは、この事件がきつかけであつたといふ。（黃學士文集二十五）これはまさしく他の幾つかの記事と共に、世祖自身は、漢人の文墨に通じなかつたことを、證明するものである。

さうして、かく漢字を讀み得ぬ世祖の文字の生活は、專らウイグル字によつた。元史の鐵哥の傳に、その寵遇のきつかけを叙して、「世祖の位に即くや、香山の永安寺に幸して、畏吾字を壁に書せるを見、誰の書する所なりやと問ひたまひしに、僧對へて曰はく、國師の兄の子なる鐵哥の書なり」といふのは、世祖がウイグル字を讀んだについての文獻であり、姚燧の「湖廣行省左丞相神道碑」つまり平宋の功臣、阿里海（アリハイ）崖の神道碑に、世祖がその江陵を下した功を賞して、「御筆もて北庭の書を爲したまふ。昔魯魯合西地に生るる所の阿力海涯には、大將と爲りて功あり、信實に聰明にして安詳なり、其れ卿に加へて阿虎耳愛虎赤嫡

近越各赤給日別平章と爲さむ」と書したといひ、かく御筆の誥命を得たのは、古の丹書鐵券にもまさる榮譽であるとたたへてゐるのは、世祖がウイグル字を書いたについての文獻である。（國朝文類五十九）

しかしながら、では世祖は、漢語の生活に對して全く冷淡であつたか、少くとも耳できいても解し得ぬほど漢語に無智であつたかといへば、さうは見がたい資料がある。たとへば「元史」の張思明の傳にはいふ、「左丞相阿合馬既に死す、世祖其の奸欺を追咎し、尙書に命じ遺孽を簿問せしむ。一日、右丞の何榮祖と左丞の馬紹に命じ、盡く其の贓を輸して入らしむ。思明には牘を抱いて從ひしが、日已に昏なり。命じて之を讀ましむ。昏より曙に達す。帝聽いて疲れを忘れ、曰はく、讀人の吐音、大いに侍儀舍人に似たりと。右丞對へて曰はく、正に舍人より選ばれて掾と爲るなりと。帝之を奇として曰はく、斯の人用ふ可しと」。世祖は單に音吐の朗々さばかりにききほれて、思明を賞識したのであらうか。さういふ風にこの記事を解するのは困難なやうに思はれる。

また程鉅夫の傳にはいふ。「父の飛卿、宋に仕へて建昌に通判たり。世祖の時、城を以て降る。鉅夫入りて質子と爲り、宣武將軍管軍千戸を授けらる。他日召見して、賈似道は如何なる人ぞと問ひたまひしに、鉅夫の條對甚だ悉なり。帝說びたまひ、箚札を給して之を書せしむ。乃ち二十餘幅を書して以て進む。帝大いに之を奇とす」。これが趙孟頫と相並んで世祖朝切つての文臣であつた程雪樓の、立身のはじめであつた。ところで、鉅夫の書した二十餘幅の內容はもとより世祖の解するところではなく、始めの口答の理解さへ、恐らくは通譯の介添へを要したことと思はれる。しかしながら、ここに重要な問題は、鉅夫が立ちどころに二十餘幅を進めたに對し、「大いに之を奇とし」たことである。私は英邁世祖の如きにあつては、たとひ一々の漢字についての智識には乏しくとも、漢字の生活が、支那人の間にかもし出す雰圍氣、それについては、ちやんと洞察してゐたと考へる。つまり二十餘幅の文字の內容は解せずとも、二十餘幅の生むべき氛圍氣は解したと思ふ。またもしさうした洞察力がなければ、潛邸の始めから、王鶚以下の耆舊を招致する筈もなく、またそれら招致された儒臣たちが、あれほどの

信賴を世祖にささげる筈もない。これも、鄭所南の「心史」の如き言說、つまり蒙古人を以て漢人の不俱戴天の仇とする言說、さうした言說ばかりを讀み慣れた人には、俄かに理解し難いことであらうけれども、世祖朝の文臣たちの、世祖に對する信賴と忠誠は、これもいつか說述の機會をもちたく思ふが、甚だ堅固なものがあり、殆んど「心史」とは對蹠的な感情である。さうした忠誠と信賴は何に基くか。最も大きくは世祖の人物の偉大さに歸せらるべきであらうけれども、更に直接には支那的な生活に對する理解の深さに基くと考へられる。支那的な生活に對する理解とは、要するに漢字の生活の支那社會に織りなす重さを認識し洞察することである。またそも〳〵この能力なくしては、易の乾の卦に取つて國號を元といひ、年號を立てて中統といひ、至元といふ筈もない。易の經文の一々の義は、もとよりその解するところではなかつた。しかしその附有する氣圍氣には、不感でなかつたと信ずる。或ひは世祖は、斷片的には漢字を知つてゐたかと考へられる資料さへある。「元史」の趙阿哥潘の傳に、「是より先き、勳臣の子孫の祖父の爲に謚を請ふ者、帝毎に之を靳む、是に至りて大臣に勅し、美謚を以て之に謚り、桓勇と謚す」といふのは、それである。

私がむすびの言葉として述べたいことは、以上を以て終る。ただ最後に私は、繰り返して斷つておかねばならぬ。最初にも述べたやうに、元の諸帝の漢文の能力は、たとひその末期の天子といへども、他の北族天子に於けるほど深厚であつたといふのでは、斷じてない。末期の天子と雖も、自ら詩文を製したといふ明證を得がたいのは、何よりもその證左である。また金、清など、他の北族の朝廷に見られるやうに、漢化を抑制して國粹を保有せんとする運動が、意識的に行はれた痕跡に乏しいのも、その漢化の淺さを示すものにほかならぬ。支那人の「文力」の前に、終に頭を低れなかつた最も崛强な民族、それはあくまでも蒙古であつた。

ただこの崛强な民族の朝廷にも、漢化の影がうつろつてゐたといふことは、從來の諸家からはあまり注意されなかつた面であり、しかもそれは獨り元史だけの問題でなく、支那史全般についても、ある程度の示唆を含み得る問題と考へた爲に、敢てそれを指摘したの

である。

今一つの附言をする。私のこの論文は、支那人の生活が蒙古人の生活に與へた影響を論じたものである。ところで私の元史に對する關心の中心は、實はそこにはない。逆に、蒙古人の生活が、支那人の生活に與へた影響にこそ、關心の中心はある。今少しく詳しくいへば、蒙古人が崛强に自らの生活樣式を、支那人の前に展示し、或ひは强制することによつて、支那人の生活は意識的無意識的に變貌を遂げた部分があり、且つその變貌は、或ひは明以後の支那人の生活の原動力となつたといふのが、私の元史に對する認識であり、關心の中心である。さきに發表した拙稿「元雜劇の作者」に於て、支那人の演劇活動が元時代に至つて始めて結晶した理由を、蒙古の統治のかもす新しい氛圍氣に求めてゐるのは、さうした認識と關心に基くものであり、同じく「元雜劇の文章」に於て、蒙古文直譯體の官文書の流行が、白話文學成熟の一因であつたと論じてゐるのも、それである。またかつて羽田先生が、「元朝の漢文明に對する態度」で指摘された如く、ウイグル字による漢字音の表出は、實に只今の注音符號の先河をなすものと考へる。

ところで、逆にこの論文では、漢人の生活が蒙古人の生活に與へた影響を考へたのは、支那人の生活に變貌を與へ得た蒙古人の崛强さ、その崛强さにも、一つの限界のあることを、まづ吟味したかつたからである。それは、不必要なより道ではない迄も、私の最も主題とするところではない。私は私の最も主題とするところ、つまり蒙古治下に於ける支那人の生活の變貌について、演劇の問題以外に、なほ二三の問題を考へてゐるのであり、他日もし整暇を得たならば、更めて諸賢の敎へを仰ぎたく思つてゐる。ただ恐れるところは、餘事に奪はれ勝ちな私に、充分その暇が與へられるか否かであつて、もし私と關心を同じくする士があり、適當な援助協力が與へられるならば、私の何よりも幸甚とするところであつて、或ひは私の集めた限りの資料を、そのまま提供しても、差支へないと考へてゐる。

（昭和十八年十二月三十一日初稿、二十年三月原稿燒失のため、再稿、四月九日東方文化研究所の宿直室にて稿了）